

#子育て処方せん

ホルモン分泌が影響

「#子育て処方せん」の今回のテーマは、ホルモン分泌の異常などで身長が伸びにくくなる「成長の遅れ」。福岡市立こども病院内分泌・代謝科長の都研一医師に原因や治療法を聞いた。

成長の遅れ

母子健康手帳には子どもの月齢や年齢ごとに身長や体重をグラフに書き込んでいくページがあり、グラフには正常な発育と言える幅を示す帯が描かれている。子どもの身長や体重がこの帯から外れていたたり、帯の中にあっても成長が急に止まったりした場合、低身長など成長障害の可能性がある。

ただ、大半は体質的な小柄であるケースだ。低身長が主な理由でこども病院を受診した人のうち、病気が原因で何かしらの治療の対象になるのは1割ほどだ。治療の対象になる低身長の大半は、ホルモンや内分泌の病気だ。子どもの体からは成長ホルモンや甲状腺ホルモン、性ホルモンといった様々なホルモンが分泌される。身長を伸ばしたり、体重を増やしたりするが、この分泌量が多すぎても少なすぎても異常につながる。

成長ホルモンの分泌が少ないと背が伸びず、多すぎると体が大きくなりすぎると、甲状腺ホルモンが多いと、バセドウ病のように、代謝が活発になりすぎて体重が増えない症状などが出る。

少ないと甲状腺の機能が低下して代謝が悪くなる。性ホルモンが少ない場合は思春期が遅れ、心身が急激に発育・発達する第二次性徴が起らない恐れがある。



都研一医師

不足時 皮下注射で補充

逆に分秘が多くなる時期が早すぎると思春期早発症となり、一時的に身長が伸びた後、早期に成長が止まって小柄になってしまうこともある。成長ホルモンが足りない場合は毎日の皮下注射で補充などする。最近では注射が週1回で済む薬も出てきている。

ほとんどのケースが遺伝的、先天的で、予防できない。成長の様子をきちんと記録して、できるだけ早期に異常に気づくことが大切だ。(聞き手 大森祐輔)

難聴の早期発見に有効として国が推奨している新生児聴覚検査。国はすべての新生児に実施するとの目標を掲げており、検査への公費助成を行う自治体も増えている。

長崎市の測レディスクリニックでは6月14日、耳や頭にイヤホンと電極装置をつけた生後3日の女児が検査を受けていた。5分ほどで終了。異常は確認されず、母親の辻口和奏



新生児聴覚検査を受ける生後3日の女児(6月14日、長崎市の測レディスクリニックで)

新生児聴覚検査 自治体助成進む

さん(25)は「生まれてすぐにきちんと検査をしてもらえると安心できると笑顔を見せた。

同院での検査は、音に対する脳幹の反応をみる「自動ABR」という方法で行われる。何らかの異常があった場合、耳鼻咽喉科に連絡し、より精密な検査を受けてもらう。長崎県では2003年から、すべての自治体が検査への公費助成を行っている。22年度には、県内の産科で生まれた新生児に7753件の検査(再検査を含む)が行われ、6人の難聴が明らかになった。

同県は、医療機関や児童福祉施設、特別支援学校と連携し、難聴児の治療や発達支援のための体制を構築している。同院の淵直樹院長は「顔が見える関係のおかげで、病院も保護者も積極的に制度を活用できる」と話す。

こども家庭庁によると、22年度には全国約8割の市区町村が検査費用の公費助成を実施。14年度の6・3%から年々、上昇している。

(今回は9月に掲載します)

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(s-sy.akal@yomiuri.com)へお願いします。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください